

夏休み。。。。

婆ちゃん家で起きた

不思議な話

DOJIN  
R18  
成人向け

18歳未満の  
購入・閲覧禁止



これは…ぼくが  
○学○年生の頃  
両親の実家に帰った時に  
体験した話。

その日の夜は  
夏だしてはとても涼しくて  
今でも覚えているくらい  
静かな夜だった

と言うのも、いつもなら  
一緒に寝ている両親や  
親戚の叔母さんたちが  
村の会合に参加する  
ということだ  
まだ幼い従妹の  
ハナちゃんを連れて  
夜中に出かけて  
しまったからなんだけど

この日僕は  
特別な機会なのもあって  
初めて婆ちゃんたちと  
一緒に寝ることをせず  
強がりもあつたけど  
一人で寝ることに  
チャレンジしたんだ

最初は涼しさが  
心地よくて  
すっかり寝れそう  
だったんだよ

でも、それは  
突然起こったんだ

心地よい空気は一変して  
まるで、突然秋だ  
なったかのような寒さを感じ…  
身体はこわばり  
思うように動かせなくなると

何かが僕の足元に  
たたくむ感覚が分かり  
恐ろしくなった僕は…  
唯一動かせた目を  
薄っすらと開けて  
周りの様子を確かめたんだ…

そこにいたのは：  
背が物凄く高くて  
見たことのない  
髪の長い**女性**だった  
ぼくはその日初めて  
金縛りと同時に  
心霊体験に遭ったのだ



見てすぐわかったよ  
それが幽霊だつてさ  
だつて透けてるんだよ？

一瞬だけ叔母さんかも？  
と思ったりもしたけど…  
どう考えても見た目からして  
別人だったし（叔母さんは髪が短かったしね）

この時の光景は今でもよく覚えてる

何かブツブツと独り言を言っていると思つて  
ふとした時にニヤツと笑つて  
とにかく不気味で怖かったから…

女幽霊がしばらく何か  
ぶつぶつと話していると思ったら  
動き出したときは本当に驚いて  
金縛りのせいなのかもしれないけど  
怖すぎて声が出なかつたくらいビビった

幽霊が動くとき冷たい空気が  
ふわっと飛んでくるのも感じて  
近づいてくるのがハッキリわかって  
とにかくパニックになっていたと思う



幽霊は僕の目の前にゆっくりと近づくと  
べろべろと顔を舐め始めて  
驚いた僕は声を殺して  
目を閉じることしかできなかった  
声も出すことも出来ない、体も動かせない。

冷たくて、ねとねとして  
目なんて開ける勇氣もなく  
ただただ早くいなくなれと  
心の中で叫んでいた。

えろ...  
ぬち...  
ん...  
ん...

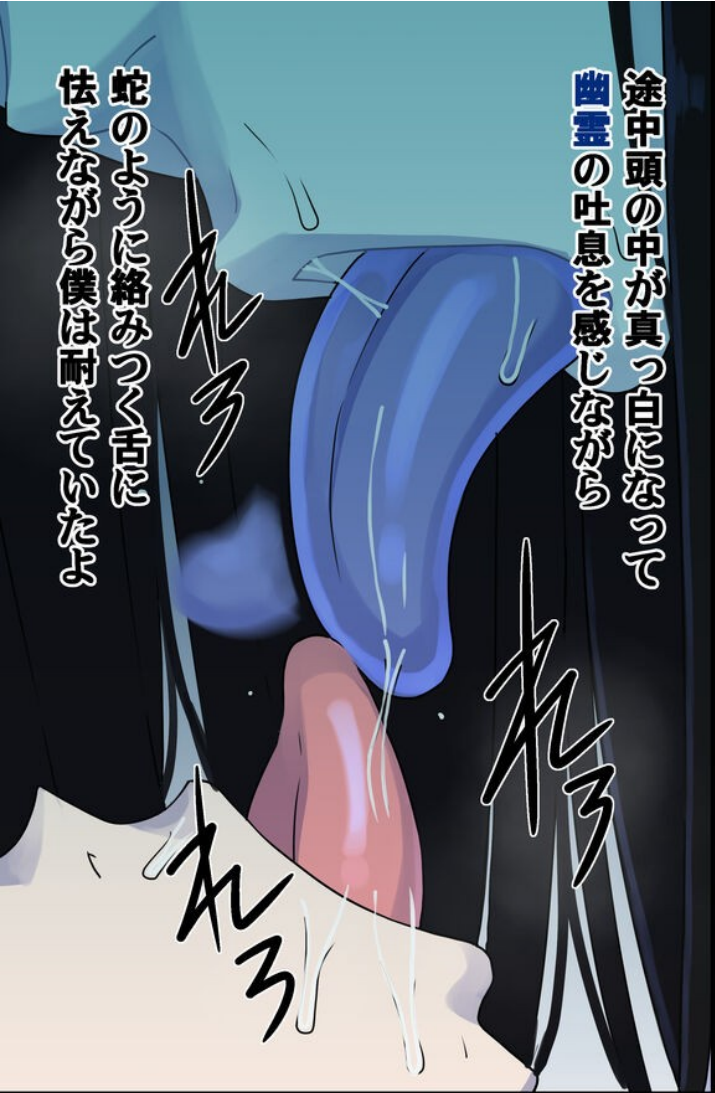


その内冷たい舌をねじ込むように  
僕の口を強引にこじ開けて  
回の中を乱暴に舐め回されてさ

あれが初めての大人のキスって  
やつだったんだろうなあ

途中頭の中が真っ白になって  
幽霊の吐息を感じながら

蛇のように絡みつく舌に  
怯えながら僕は耐えていたよ



その内耳から足の先までペロペロと…  
随分と長い時間舐められていた気がする  
念入りに全身舐め尽くされて  
幽霊は特に乳首をしつこく舐めてきた

冷たくて気持ち悪いんだけど  
ちんちんがカチカチになって  
不思議な感覚だった



目を閉じて早く終われ!と  
思いながらじつとしていると  
その内僕のスポンが下へとスレていく  
感覚が分かり、目を開けて確認すると  
幽霊が笑いながら僕のスポンを  
脱がしているのが分かった

不気味に微笑む幽霊は  
どこか嬉しそうで  
僕はこのいつが何をやる気なのかわからず  
動かない身体を必死に動かそうとするも  
願いは叶わず、ただ脱がし終わるのを  
見ていることしかできなかった

冷たい空気が硬く熱くなったちんちんだ  
そよそよと当たり  
部屋の冷たさがよく分かるようになって  
余計に緊張して身体が強張ると

幽霊が僕のちんちんに顔を近づけ  
しばらく観察していると僕の様子を見ては  
度々息を吹きかけたり、匂いを嗅いだり  
いつ嘔みつかれるんじゃないかと  
その時は気が気じゃなかった

その内僕のちんちんを  
何かに包み込まれる感覚が襲い  
ペロペロと舐められているのが分かって  
身体がのけ反る程の強烈な刺激に混乱したんだ

いつ噛まれるかヒヤヒヤしながら恐怖し  
グツと堪えるしかなかった僕は  
初めての感覚に困惑しつつ  
必死にこみ上げる何かに興奮していたと思う

なにせ初めてのことだったし  
ちんちんを舐められることが  
こんなにあきもちよかったなんて  
この時まで知らなかったから

幽霊の冷たくて長い舌は僕の小さな  
ちんちんをしつこく撫でまわして…  
怖かったけど気持ちよさが上回り  
もっと舐めてほしいと  
少しづつ思うようになっていった

は

は

は

は

ねろ...

ねろ...

幽霊は態勢を変えては冷たい体を僕に密着させて覆いかぶさりながら一心不乱に僕のちんちんを舐めてきて僕はその内夢心地のような感覚になっていった

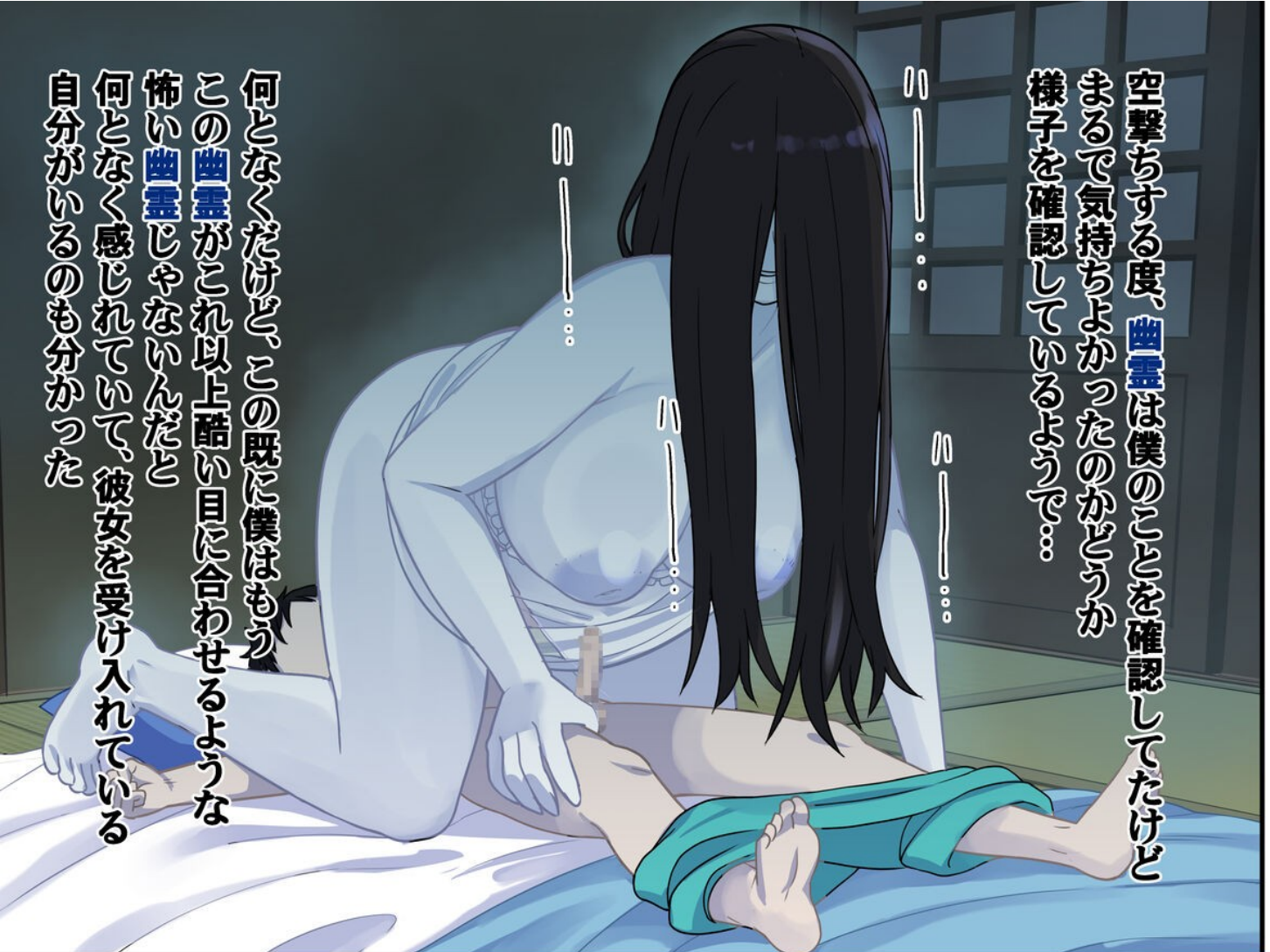
金縛りで動けない体も最初ほど力ませることもなくこの時には諦めも込みで現状を受け入れていたと思う

そんな中じつくり観察することでちんちんを舐められることに集中した僕はこの時何度も何かがかみ上がるような感覚を味わっていてあれがオーガズムの感覚だと分かったのはしばらく経ってからになる

ねとねとぶちゅぶちゅと音を立てて僕の耳に強烈に響いて脳が溶ける感覚は今でも忘れられない感覚だったよそういえばあの時妙に周りが静かだったけど虫の声一つさえ聴こえなかった気がする

空撃ちする度、幽霊は僕のことを確認してたけど  
まるで気持ちよかったのかどうか  
様子を確かめているようで…

何となくだけど、この既に僕はもう  
この幽霊がこれ以上酷い目に合わせるような  
怖い幽霊じゃないんだと  
何となく感じれていて、彼女を受け入れている  
自分があるのも分かった



ちんちんを舐めるのを止めて動きだした時は  
次は何をするんだ？と一瞬冷静になって  
また怖くなって不安になったんだけどさ…

その不安も一瞬だった



幽霊は僕の下半身にゆっくりと腰を下ろすと  
ちんちんを全て飲み込んで  
満足そうに微笑みながら服を脱ぎ

は……

は……

初めてのセックスに  
困惑している僕の様子を嬉しそうに  
じっと見つめて笑っていた



幽霊の中は冷たいんだけど  
物凄くねっとりしていて

僕のちんちんがキュウキュウと  
締め上げられるのが分かって離さず

ぬち...

ぬぼぬぼぐちゅぐちゅと音を立て

必死に腰を振って笑っていた



この時すでに金縛りは無くなっていて  
自由に動けるようになっていたんだけど  
幽霊の食るようなナメクジみたいな交尾のせいで  
しばらく動くことが出来なくて...

さっきまで気持ち悪かったキスを求めるように  
必死になって舌を絡めて幽霊を受け入れていた




それ以降はあんまり覚えてないんだよね：  
でもハッキリ覚えているとしたら  
僕は必死になって永遠に治まることのない  
ちんちんを治めるために

幽霊に腰を打ち付けたということだけ

必死に抱き着いて何度も何度も  
大きなお尻に叩きつけて  
無我夢中で柔らかく、気持ちいい感触の  
女性の身体を味わうために  
幽霊にしがみついていたはず


ああ、あとあれだ  
幽霊が途中声色を変えて喘ぎ声を  
部屋中に響かせ始めたんだけど  
そこからが凄かったのも覚えてる

幽霊が感じているのが何となく分かって  
酷く興奮したんだろうなあ  
さらに激しく腰が動いて絶頂する感覚と同時に  
出し入れして猛烈な刺激で気絶しそうになったから



そういうえば、何回絶頂の感覚を味わったのか  
分からないくらい何度も何度も何度も  
**幽霊**の身体を求めた僕はいつの間にか精通も  
済ませていたみたいで…

途中から自分のちんちんから  
何かが出る強烈な感覚があるのが分かって  
全て中で果でていたから気づかなかったけど



一度引き抜いたときに白い液体が**幽霊**から  
溢れ出てくるのを見て、自分のちんちんから  
何か出たことを確認したのは  
本当に最後の方だった

**幽霊**の穴の中は  
僕の精液でいっぱいになっていただろう  
射精の感覚があつてからも  
数回は中に出していたから…

無限に射精の感覚を味わった僕は  
いつの間にか布団に倒れこみ  
下半身を丸出しにして寝ていた

あの幽霊がなんだったのか  
何故現れたのか

幽霊はいなくなっていて  
これ以降、婆ちゃん家の  
この部屋に泊まっても  
出てくることはなかった…

わからないまま長い長い  
月日が流れていった…



あれ以来も  
何回も婆ちゃん家に  
泊まることが  
あったけど

あの幽霊が  
現れることを  
期待して泊まれど

現れることもなく

それなりの月日が  
流れていって

諦めかけていた  
ある日のこと



僕はまた「一人」で

あの部屋で  
寝る機会が訪れて…



そういえば、後になって知ったのですが  
うちの婆ちゃんの家系に若くして亡くなった  
保育園を経営していた**女性**がいたそうで

婆ちゃんの祖母、僕の高祖母の妹さんってことらしいけど  
子供が大好きで面倒見がよく  
村のみんなに凄く慕われていたそうです

そんな僕の祖先でもある女性が  
よく子供を寝かしつけていた部屋が  
この部屋だったんだとか…

おまい

## 【奥付け】

- 誌名 : 夏休み…婆ちゃん家で起きた不思議な話
- 著者 : れオナるド16世
- 発行者 : テコキッズ
- イベント : コミックマーケット104
- 発行日 : 2024年8月12日
- HP : <https://ci-en.dlsite.com/creator/2674>
- Pixiv : id= 287998
- Twitter : id= @MameTanukiGirl

- ・当本は18歳未満の購入は禁止です。
- ・当本の内容の無断転載、アップロードは禁止です。

诛仙

夏休み。。。。

婆ちゃん家で起きた

不思議な話

DOJIN  
R18  
成人向け

18歳未満の  
購入・閲覧禁止



これは…ぼくが  
○学○年生の頃  
両親の実家に帰った時に  
体験した話。

その日の夜は  
夏だとしても涼しくて  
今でも覚えているくらい  
静かな夜だった

と言うのも、いつもなら  
一緒に寝ている両親や  
親戚の叔母さんたちが  
村の会合に参加する  
ということだ  
まだ幼い従妹の  
ハナちゃんを連れて  
夜中に出かけて  
しまったからなんだけど

この日僕は  
特別な機会なのもあって  
初めて婆ちゃんたちと  
一緒に寝ることをせず  
強がりもあつたけど  
一人で寝ることに  
チャレンジしたんだ

最初は涼しさが  
心地よくて  
すっかり寝れそう  
だったんだよ

でも、それは  
突然起こったんだ

心地よい空気は一変して  
まるで、突然秋だ  
なったかのような寒さを感じ…  
身体はこわばり  
思うように動かせなくなると

何かが僕の足元に  
たたくむ感覚が分かり  
恐ろしくなった僕は…  
唯一動かせた目を  
薄っすらと開けて  
周りの様子を確認したんだ…

そこにいたのは：  
背が物凄く高くて  
見たことのない  
髪の長い女性だった  
ぼくはその日初めて  
金縛りと同時に  
心霊体験に遭ったのだ



見てすぐわかったよ  
それが幽霊だってさ  
だって透けてるんだよ？

一瞬だけ叔母さんかも？  
と思ったりもしたけど…  
どう考えても見た目からして  
別人だったし（叔母さんは髪が短かったしね）

この時の光景は今でもよく覚えてる

何かブツブツと独り言を言っていると思つて  
ふとした時にニヤツと笑つて  
とにかく不気味で怖かったから…

女幽霊がしばらく何か  
ぶつぶつと話していると思ったら  
動き出したときは本当に驚いて  
金縛りのせいなのかもしれないけど  
怖すぎて声が出なかつたくらいビビった

幽霊が動くとき冷たい空気が  
ふわっと飛んでくるのも感じて  
近づいてくるのがハッキリわかって  
とたかくパニックになっていたと思う



幽霊は僕の目の前にゆっくりと近づくと  
べろべろと顔を舐め始めて  
驚いた僕は声を殺して  
目を閉じることしかできなかった  
声も出すことも出来ない、体も動かせない。

冷たくて、ねとねとして  
目なんて開ける勇氣もなく  
ただただ早くいなくなれと  
心の中で叫んでいた。

えろ...  
ぬち...  
ん...  
ん...



その内冷たい舌をねじ込むように  
僕の口を強引にこじ開けて  
回の中を乱暴に舐め回されてさ

あれが初めての大人のキスって  
やつだったんだろうなあ

途中頭の中が真っ白になって  
幽霊の吐息を感じながら

蛇のように絡みつく舌に  
怯えながら僕は耐えていたよ

その内耳から足の先までペロペロと…  
随分と長い時間舐められていた気がする  
念入りに全身舐め尽くされて  
幽霊は特に乳首をしつこく舐めてきた

冷たくて気持ち悪いんだけど  
ちんちんがカチカチになって  
不思議な感覚だった

目を閉じて早く終われ!と  
思いながらじつとしていると  
その内僕のスポンが下へとスレていく  
感覚が分かり、目を開けて確認すると  
幽霊が笑いながら僕のスポンを  
脱がしているのが分かった

不気味に微笑む幽霊は  
どこか嬉しそうで  
僕はいいつが何をやる気なのかわからず  
動かない身体を必死に動かそうとするも  
願いは叶わず、ただ脱がし終わるのを  
見ていることしかできなかつた

冷たい空気が硬く熱くなったちんちんだ  
そよそよと当たり  
部屋の冷たさがよく分かるようになって  
余計に緊張して身体が強張ると

幽霊が僕のちんちんに顔を近づけ  
しばらく観察していると僕の様子を見ては  
度々息を吹きかけたり、匂いを嗅いだり  
いつ嘔みつかれるんじゃないかと  
その時は気が気じゃなかつた

その内僕のちんちんを  
何かに包み込まれる感覚が襲い  
ペロペロと舐められているのが分かって  
身体がのけ反る程の強烈な刺激に混乱したんだ

いつ噛まれるかヒヤヒヤしながら恐怖し  
グツと堪えるしかなかった僕は  
初めての感覚に困惑しつつ  
必死にこみ上げる何かに興奮していたと思う

なにせ初めてのことだったし  
ちんちんを舐められることが  
こんなにあつちよかつたなんて  
この時まで知らなかったから

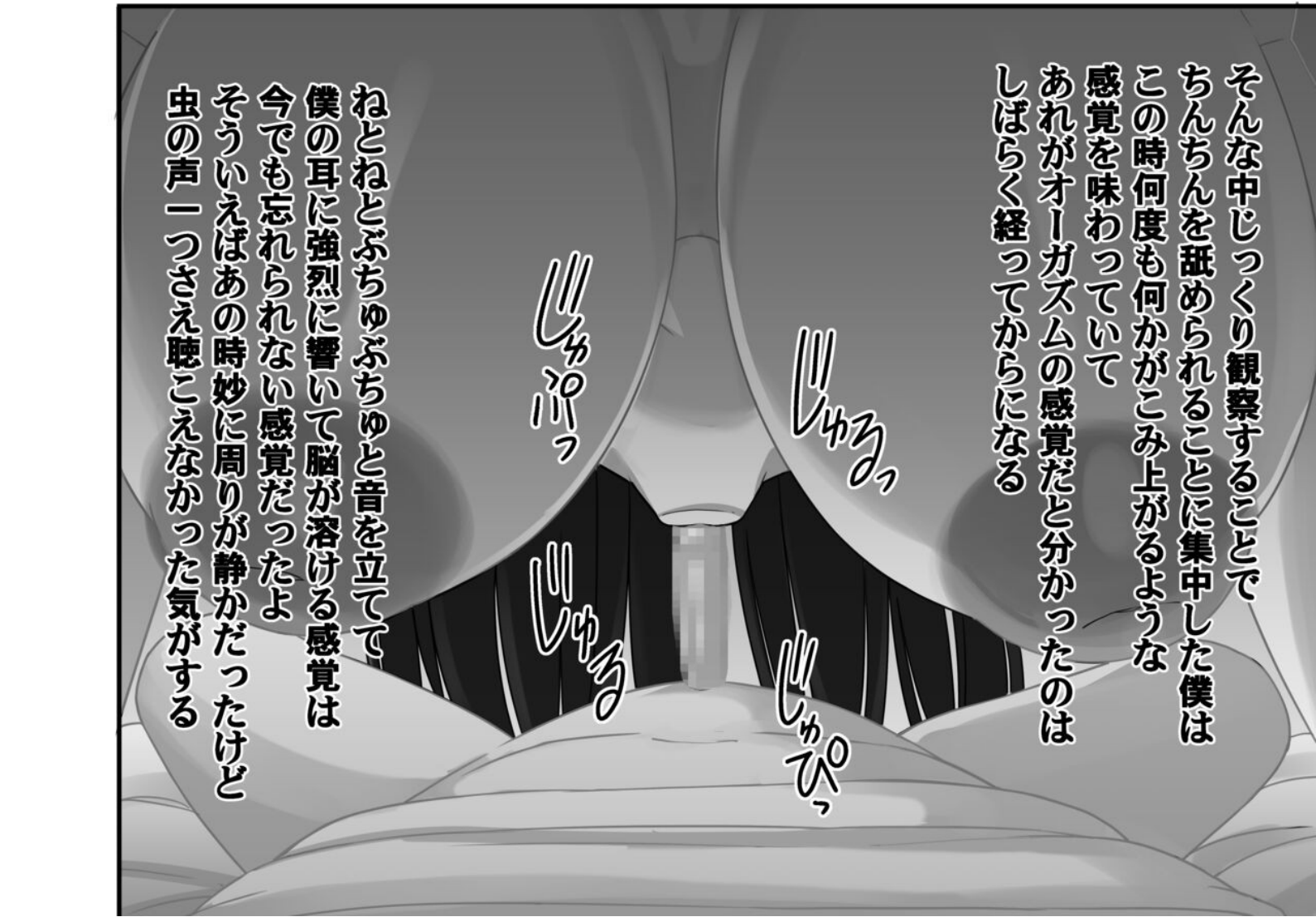
幽霊の冷たくて長い舌は僕の小さな  
ちんちんをしつこく撫でまわして…  
怖かったけど気持ちよさが上回り  
もっと舐めてほしいと  
少しづつ思うようになっていった

は……  
は……  
は……  
ねろ…  
ねろ…



幽霊は態勢を変えては冷たい体を僕に密着させて  
覆いかぶさりながら一心不乱に  
僕のちんちんを舐めてきて  
僕はその内夢心地のような感覚になっていった

金縛りで動けない体も  
最初ほど力ませることもなく  
この時には諦めも込みで  
現状を受け入れていたと思う



そんな中じっくり観察することで  
ちんちんを舐められることに集中した僕は  
この時何度も何かがこみ上がるような  
感覚を味わっていて  
あれがオーガズムの感覚だと分かったのは  
しばらく経ってからになる

ねとねとぶちゅぶちゅと音を立てて  
僕の耳に強烈に響いて脳が溶ける感覚は  
今でも忘れられない感覚だったよ  
そういえばあの時妙に周りが静かだったけど  
虫の声一つさえ聴こえなかった気がする

空撃ちする度、幽霊は僕のことを確認してたけど  
まるで気持ちよかったのかどうか  
様子を確かめているようで…

何となくだけど、この既に僕はもう  
この幽霊がこれ以上酷い目に合わせるような  
怖い幽霊じゃないんだと  
何となく感じれていて、彼女を受け入れている  
自分がいるのも分かった

ちんちんを舐めるのを止めて動きだした時は  
次は何をするんだ？と一瞬冷静になって  
また怖くなって不安になったんだけどさ…

その不安も一瞬だった

はみ…

はみ…

幽霊は僕の下半身にゆっくりと腰を下ろすと  
ちんちんを全て飲み込んで  
満足そうに微笑みながら服を脱ぎ

は……

は……

は……

は……

初めてのセックスに  
困惑している僕の様子を嬉しそうに  
じっと見つめて笑っていた



幽霊の中は冷たいんだけど  
物凄くねっとりしていて

僕のちんちんがキュウキュウと  
締め上げられるのが分かって離さず

ぬち...

ぬぼぬぼぐちゅぐちゅと音を立て

必死に腰を振って笑っていた

にちゅっ  
にちゅっ  
にちゅっ  
にちゅっ

この時すでに金縛りは無くなっていて  
自由に動けるようになっていたんだけど  
幽霊の食るようなナメクジみたいな交尾のせいで  
しばらく動くことが出来なくて...

さっきまで気持ち悪かったキスを求めるように  
必死になって舌を絡めて幽霊を受け入れていた


ちゅっ  
ちゅっ  
ちゅっ

それ以降はあんまり覚えてないんだよね：  
でもハッキリ覚えているとしたら  
僕は必死になって永遠に治まることのない  
ちんちんを治めるために  
幽霊に腰を打ち付けたということだけ

必死に抱き着いて何度も何度も  
大きなお尻に叩きつけて  
無我夢中で柔らかく、気持ちいい感触の  
女性の身体を味わうために  
幽霊にしがみついていたはず


ああ、あとあれだ  
幽霊が途中声色を変えて喘ぎ声を  
部屋中に響かせ始めたんだけど  
そこからが凄かったのも覚えてる

幽霊が感じているのが何となく分かって  
酷く興奮したんだろうなあ  
さらに激しく腰が動いて絶頂する感覚と同時に  
出し入れして猛烈な刺激で気絶しそうになったから



そういうえば、何回絶頂の感覚を味わったのか  
分らないくらい何度も何度も何度も  
幽霊の身体を求めた僕はいつの間にか精通も  
済ませていたみたいで…

途中から自分のちんちんから  
何かが出る強烈な感覚があるのが分かって  
全て中で果でていたから気づかなかったけど



一度引き抜いたときに白い液体が幽霊から  
溢れ出てくるのを見て、自分のちんちんから  
何か出たことを確認したのは  
本当に最後の方だった

幽霊の穴の中は  
僕の精液でいっぱいになっていただろう  
射精の感覚があつてからも  
数回は中に出していたから…

無限に射精の感覚を味わった僕は  
いつの間にか布団に倒れこみ  
下半身を丸出しにして寝ていた

あの幽霊がなんだったのか  
何故現れたのか

幽霊はいなくなっていて  
これ以降、婆ちゃん家の  
この部屋に泊まっても  
出てくることはなかった…

わからないまま長い長い  
月日が流れていった…



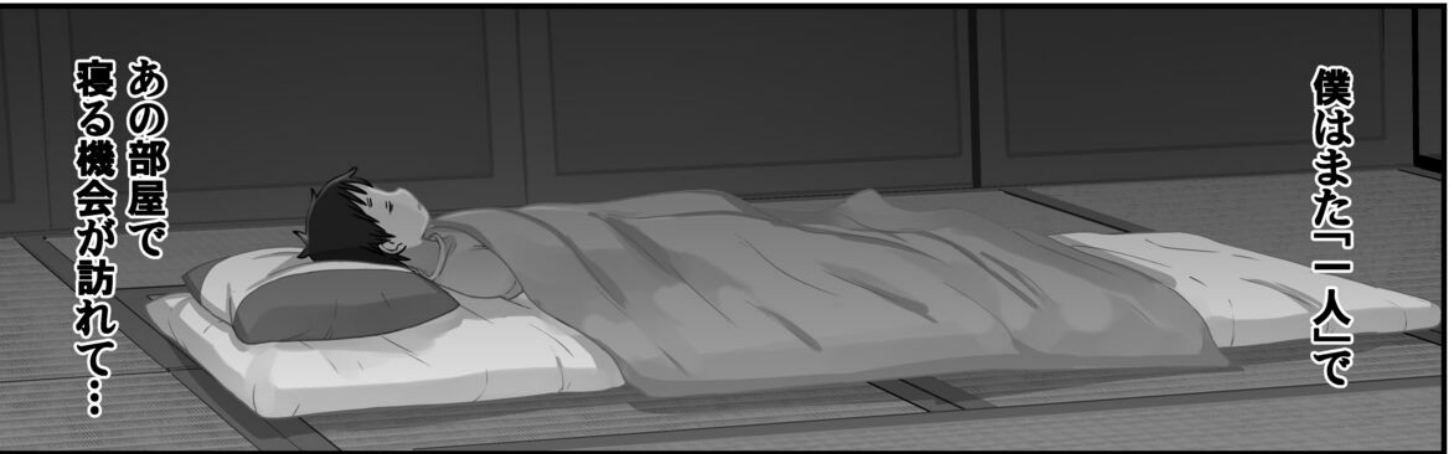
あれ以来も  
何回も婆ちゃん家に  
泊まることが  
あったけど

あの幽霊が  
現れることを  
期待して泊まれど

現れることもなく

それなりの月日が  
流れていって


諦めかけていた  
ある日のこと



僕はまた「一人」で

あの部屋で  
寝る機会が訪れて…





そういえば、後になって知ったのですが  
うちの婆ちゃんの家系に若くして亡くなった  
保育園を経営していた女性がいたそうで

婆ちゃんの祖母、僕の高祖母の妹さんってことらしいけど  
子供が大好きで面倒見がよく  
村のみんなに凄く慕われていたそうです

そんな僕の祖先でもある女性が  
よく子供を寝かしつけていた部屋が  
この部屋だったんだとか…

おまい

## 【奥付け】

- 誌名 : 夏休み…婆ちゃん家で起きた不思議な話
- 著者 : れオナるド16世
- 発行者 : テコキッズ
- イベント : コミックマーケット104
- 発行日 : 2024年8月12日
- HP : <https://ci-en.dlsite.com/creator/2674>
- Pixiv : id= 287998
- Twitter : id= @MameTanukiGirl

- ・当本は18歳未満の購入は禁止です。
- ・当本の内容の無断転載、アップロードは禁止です。

手城